
アルとマシューの魔法修行

Arthur

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルとマシューの魔法修行

【Zコード】

N1241BA

【作者名】

Arthur

【あらすじ】

双子のマシューとアルフレッド。二人はとある満月の夜、魔法修行に出かけた。

夜汽車にのつて着いた港街、そこには兄弟でパン屋を営む魔法使い、アーサーとフランシスがいた。なんだか、想像力の「そ」の字もないありきたりなお話ですが、暇な方は見てやってください。

1話と2話をつなげました。

満月の夜は旅立ちの日。（前書き）

満月の夜に出発したいじゃないか！――今日は記念すべき日なんだぞ
発想力のない作者はヘタリアと何かのパロしかできなこと思つんで
す。で、文章力もありません。アマゾン川並みの広さの心を持つて
この小説に挑んでください。

満月の夜は旅立ちの日。

? 東北東の風、風力1、晴れやかな満月の夜になるでしょう?
風の音、草がこすれあう音、蜂の飛ぶ音。たくさんの音に囲まれながら、俺はラジオの天気予報を聞いていた。なぜかって?今日は記念すべき独り立ち、あつ違う。一人立ちの日になるかもしれないからさ。旅立ちに良い天気は欠かせないだろう?俺は、自分を鍛えるために修行に出るんだ!

「アルー? ホットケーキ焼けたよー! 早く戻つて来てくれよー!」
この俺を呼ぶ声の主はマシューって奴。俺の双子の兄貴なんだ。独り立ちじゃなくて二人立ちなのはマシューと一緒に修行に出かけるからさ! ああ、そういえば肝心な自己紹介を忘れていたね。俺は魔法使いの血を受け継ぐ、「アルフレッド」さー!

さつきの話に戻るよ。えーっと・・マシューのホットケーキはすっごく美味しいんだ!! おいしいホットケーキを食べる前に天気予報の事を皆に伝えなくちゃ!!

「マシュー!! 今日は満月だ!! 晴れるつてさ!! 早く師匠たちに伝えに行こう!!」

俺は、俺の事を迎えに来てくれたマシューの前を走つて通り過ぎ、師匠たちのいる家へと向かう。

「王躍!! 菊!! 今日俺たち出発するよー!!」

開いている窓から家中にいる一人に話しかける。

「はあ?! ホントに行くつもりだたあるか?! お前たちがまだ早いある!! それにあれはかなり昔の」

「いいじゃないか!! 君たちは俺たちと同じ年の時に修行を行つた

んだろ？あ、菊ーーあのラジオもひつわーー！」

「アルフレッド！！」

「わあん！！

王躍は薬を作っていたのだが、大声を出したせいで心が乱れたのだろう。薬はものすごい音を立てて爆発してしまった。

「H A H A H A」

「スミマセン。。。王さん。。。」

階段を急いで上がり自分の部屋にあがっている俺の後ろに続くマシューは、階段を上がりながら王躍に謝っていた。

（とにかくーー！俺は絶対、修行に行くんだぞーー！）
俺は勢いよく階段を駆け上がった。

「ねえ、アルー。やつぱり、王さんたちの言つとおりにした方がいいよ。修行は・・・」

僕は、大きなバックに自分の荷物を押し込んで出発の準備をしているアルに話しかける。

「何言つてるんだい？君だつて父さんたちの、本当のこと、知りたいんだろう？」

アルは荷物を押し込んでいた手を止めて、僕に、少し怒った感じの厳しい表情を向ける。

「そう・・・だね・・・。」

（アル・・・まだ父さんたちの事を・・・もつ、いいじやないか・・・。あんな事件、早く忘れてしまおうよ・・・！もし、あの時僕が見たものが夢じやなかつたら、一人は・・・。）

「あの、お二人とも。」

後ろから菊さんの声がしたものだから僕の頭の動きが一瞬止まる。だつて、考えてた人がいきなり目の前に現れたら、びっくりするでしょ？良い事じやなかつたらなおさらね。

「・・どうか、なさいましたか・・・？」

そんな僕をみて菊さんは心配そうに顔を覗き込んでくる。

「ああ！！ハイ！大丈夫です・・・」

そう答えた僕を見て菊さんはにっこりと微笑む。

「なあ、菊！俺たち、今夜修行に行つてもいいよなあ？」

突然、アルは菊さんの着物の袖をぐいぐい引っ張りながら菊さんに話しかける。菊さんは「着くずれしてしまいますよ。」と困った顔をしてアルの腕を袖から離させる。

「・・はあ。修行に出る、ですか。でも、修行はとても大変ですよ？」

一息ついてから菊さんは眉をひそめながらそう言った。

「大変じやなきや修行じやないじやないか！何言つてるんだい、菊！――」

いつものように笑顔で答えるアル。菊さんは眉をひそめた顔のまま、少し口角をあげた表情を僕たちに見せて部屋を出ていってしまった。

僕は、ふと階段を下りていく菊さんを見た。その時の菊さんの表情。それは、いつもの菊さんからは想像できないような厳しい表情だったんだ。

「王さん。やはりお一人は修行に行くつもりのようですよ。」

薬を作りなおしている我の所に菊がやって來た。できるだけ表情に

しないようにしていよいよつたが、

我と菊は付き合いが長い。本当はとてもあせっているのがよく分かつた。

まあ、当然だらう。あの一人が修行に出て、あの街に着いてしまつたら。そこにいる兄弟に一人が会つてしまつたら。そこで、真実を知つてしまつたら。

四方を守る守り神よ。どうか、あの一人との関係が、今そのままずっと。

(・・・無理あるか・・?まあ、我はたくさん酷い事したある。貴方達の罰を受ける覚悟はできてるあるよ・・・。)

「さう・・あるか・・・まあ、あの街は結構遠いある。一人も、ホウキで街を探すはずある。きっと、大丈夫あるよ。

守り神よ。さつきの願いが聞き入れてもうえないので、これが最後の願いでかまわねえある。

菊の

満月の夜は旅立ちの日。（後書き）

はいーーー！まあ、ありがと、ついでこます。もうちょっとペロやめて自分でストーリー考えらやー！とこいつ方もこいつしゃるいじとじょい。本当に申し訳ありません。

ですがーーー！のあとがきをあなたが読んでーーーるとこいつ事は、あなたがこの小説を最後まで読んでくれたという事。本当にありがとうございます。

1話に乗っ起きる事ができたあなたならきっと大丈夫ー最後までよろしくお願いしますーーー！

シナリイをぶれせんじ。 (前書き)

題名適当につけたのであんまり本編と関係ありません。補足、とい
う事で。

シナティをぶれせんと。

荷物の用意は途中で飽きたアルは、荷物をほっぽり出して僕の隣でじろじろしていた。

「なあ、マシュー。」

「ごろごろしているだけといつのも飽きたのだろう。アルは僕に話しかけてきた。

「なあに？ アル。」

どうせアルの荷物も僕が準備するんだろうな・・・といつ事を考えているからか少し声が沈む。

「修行先ってどうやって見つけるんだい？ ホウキだけじゃ遠くまで行けないだろ？ そうなると、近い所になっちゃうのかなあ・・・修行先。」

うつぶせになっていたアルは僕を見上げて不安そうに尋ねてきた。「うーん・・・別に移動手段はホウキじゃなきゃいけないってわけじゃないけど・・・修行先は魔法使いのいる街に行けばいいんだよ。実はね・・・。」

ここで僕が王さんの書斎にこっそり入って書き集めた世界各地の魔法使いの資料が載っているメモをポケットから取り出す。

このメモ、書くの大変だったんだよね〜、実は王さんの書斎にある秘密文庫のないようなんだ。王さんに口が怪しい感じのネコのぬいぐるみをあげて油断させて・・・。まさかあんなに気に入ってくれるとは思わなかつたよ・・・。

「じゃじゃーん！－すごいでしょ！－これに載つてる人たち、みんな魔法使いなんだよー！」

僕はメモの両端を掴みアルの顔の前に突き出した。

「WOW！－凄いじゃないか！マシュー！さすがは、俺の兄貴だ！－なになにー？」

メモを眺めるアル。しかし、じぱりくすると顔をしかめてしまった。
「う～ん・・・なんか難しいんだぞ。マシューが決めておいてくれ。

「うん。わかった・・・。」

「あ、そうだ。できる限り父さんの秘密を知つてそうな魔法使いを選んでくれよ！それと、移動手段はホウキ以外ので！」

（ほんとに・・・まかせっきりなんだから・・・。アルは・・・。）

シナティイをぶれせんと。（後書き）

アル「なあ、マシュー。」

マシュー「なんだい？」

アル「この話が中途半端なのは2話を一話と合体させたら、もともとの2話の本編のところが空欄になっちゃつたからなんだろう?」

マシュー「言わないであげて・・・作者は作者で頑張ったんだとおもうよ・・・」

夜汽車での出会い

「じゃあ、行つて来るんだぞ！－！」

「行つてきますね。」

そう言つて一人は夜汽車に乗りこんだ。「行つてらっしゃい。」「気をつけるあるよ～」と言しながら電車の窓から手を振る一人に手振り返した。

「行つて・・・しまいましたね・・・。」

「ああ、まさか汽車で行くとは思つてなかつたある・・・。もしかしたらあの街に・・・。」

私たちの不安は募つていくばかりでした。

「ふう・・・。やつと修行の始まりだな！－マシュー！－！」

「しーつ！－他のお客さん目が覚めちゃうでしょ！－今、夜なんだから静かにしててよ！－」

僕がそう言つとアルは口元を手で押されて辺りをきょろきょろ見回してから俺に笑つてを見せた。

（ホントにアルはお茶目なんだから。全く・・・）

一度窓の外を見てからアルの事を見た。そしたら、この短時間の間にアルは寝むりに就いていて。そんなアルの寝顔を見ていたら僕も、いつの間にか眠りについていた。

「ん。ああ、アーサー、来てくれたんか～！助かったわあ～ホンマ、
あのお客さんぜんぜん見え覚まさないねん～！」

「ああ・・。にしても、なんでお前の運転する汽車はいつも寝て起きない奴が多いんだ・・？」

アーサーは、俺の運転していた汽車の終点、「ポートマリティーン」のホームで電車に乗つた俺と話していた。

「そんなん、俺の運転がすっぱらしく気持ちいからに決まつたやろ～！～まあ、そんなんええから、さつわと魔法であいつら起きてえな～～！」

「分かつてゐよ～～あ、これ俺の為だからな～～ただ、えっと・・・魔法の練習の為だ～～決してお前の為なんかじや・・・！」

「わあつてるて。ササッと電車ん中入り。」

ぶつぶつ言いながらアーサーは電車の中に入つて來た。てか、お前の魔力なら別に練習しなくてもいいだろ、と言おうとしたけど、喉で押された。

(機嫌そこねられたら、困るわ・・・。)

「ふう・・。Wake up . Of sleep over time .

アーサーが眠つている一人の客に両手をかざし、呪文を唱えた。なにも起こつていなければ見えたが確実に呪文は効いていたようだ。

「ふあああ・・・ましゅー・・・ここどこだい？」

「知らないよ・・・なんでも僕に聞かないで・・・。」

さつきまで叩いてもトマトを顔に押し付けても起きなかつた客一人が目を覚ましたのだ。まだふわふわした感じだつたが、二人はアーサーの声で確実に起きることになる。

「てめえら・・・さつさと起きろ～～もう、終点なんだよつ～～途端に背中をピンと伸ばす一人。これは・・・魔法じゃなさそうだ。

「うわあ……なんだい？——君は……HEROのお休み中だったのに
！——失礼じやないか！——」

眼鏡愛用者のように眼鏡をかけながらアーサーに反論する。そいつの連れと思われるもう一人の密はとてもおどおどしてくる。

「終点なのに起きねえ、お前らの方がよっぽど失礼だ……。」

「つむれいなあ。とにかく、もつひとつ眠りさせてもらひや……。」

反省も何もしていなこようで少年は毛布をかぶつてもつ一度寝みつとする。

「てんめえ……いい加減にしろよ……。」

「HEROは寝てますよ~だつ~」

ピチッ！

(え・・?なんか今変な音)

「こんのがギキドもおおおおおおお……」「つむれたら俺の魔法でコイツらのこじとスローンの材料にしてやるつ……。」
サツと懐から杖を出したアーサーを俺は咄嗟にアーサーを止めに入る。

「んなひ……そんない」としたらあかんて、アーサーつ……。」

(え・・?今、「アーサー」つて……。)

ガシツッ！

「あなた……魔法使いの、アーサーさんなんですかっ

?！

夜汽車での出会い（後書き）

（舞台裏）

アル「なあ、マシュー」

マシュー「なに？」

アル「君、アーサーに抱きつくなに抵抗なかつたのかい？」

マシュー「え・・」

アサ「うるせえ、ばかあ！！」

一人の魔法使い

「あなた・・・魔法使いの、アーサーさんなんですか？」

突然俺に抱きついてきた少年、抱きついたというよりは飛びついた
という感じだろうか。さつきまでおどおどしていただけでよく意識
していなかつたから、いきなり飛びつかれると正直びっくりする。

「あ・・あ・・」

まだ言葉を伸ばし切つていなかつた所に、少年が言葉を重ねる。

「あの・・！僕たち魔法使いで、今、修行の身なんです！…どう
か、僕たちに魔法を教えてくれませんか？」

まっすぐな瞳で真剣に頼まれると、なかなか断れないもんだ。

「え、ああ。俺は別にいいが・・・。フランシスの許可を取つてか
らでもいいか？」

少し遠慮勝ちに言つと、少年は満面の笑みで「もちろんです！」
と答えた。

（なんか・・勝手に話が進んでいるんだぞ・・・。）

「おい！マシュー！…どうしてそんなヤツに魔法を教わるんだい？
この街には、彼以外の魔法使いがいるだろう？」

俺がそう言つとアーサーという青年が悲しそうな顔をしながらこつ
言つた。

「この街にはもう、俺とフランシス位しか大きな魔法を使える奴は
残っていない。3年前の西と東の大戦争で、みんな死んじました・
・。」

そつ言つとアーサーはキュッと口元を固く結んで黙りこくれてしま
つた。

（3年・・前・・・？）

アルは僕の横で目をまん丸に見開いていた。3年前、それは父たちが死んだ年だ。

(アル・・やつぱり父さんたちの事を・・・)

西と東の魔法を使った大戦争、それに巻き込まれてたくさんの魔法使いが亡くなつた。もちろん、魔法を使えない一般の人も。その戦争があつた年、僕とアルは、まだ王さんたちの所で魔法を習つていなかつたんだ。今僕たちのいる、西の港町「ポートマリティーン」と東の山岳街「シャンション」の丁度真ん中あたりの街、「プレ」という街で、僕たち一人は父さんに魔法を習つていた。

西の港町と東の山岳都市の戦争が行われた場所は、僕たちの住む「プレ」だった。予告もなしに突然降り注ぐ魔法攻撃に、僕たちの街の人々は対応しきれなかつた。僕たちの目の前で、父さんも、母さんも、街の人も、みんな命を落としたんだ。

しかし、僕の回想は言わせないと言わんばかりにアーサーさんが閉じていた口を開いた。

「まあ、とにかくだ！俺の家に置いてやつから、ついてこい！！！」
そう言つて歩いていくアーサーに、車掌さんが「また頼むで～！」
と言つて手を振つている。

「「ひぬせえ～アントー～」」

(あれ・・?ホントにこの人、あのアーサーさんなのかな・・・?
?やけにはつちゃけてるんだけど・・・)

僕たちの修行は、まだ始まつたばかりです。

一人の魔法使い（後書き）

ここまで読んでくださって本当にありがとうございます。
ぐちゃぐちゃしてて分かりづらいし頭の悪い表現ではありますが、
これからもよろしくお願いします。

黒十字（前書き）

皆様の好きなキャラがショッパンから死んでしまっているかもしだせん。

注意してください。。。

「アーサー……、フェリシ、アーノを、よろしく頼む……。」

「ルートつ？ ルートつ！？」

いくらルートの事を搔きぶつても、ルートの臉が再び上がる事はなかつた。

「フェリシアーノをよろしく」と言いながら俺に黒十字を手渡したルート。フェリシアーノにこれを渡せという事なのだろう。でも。

「フェリシアーノは、今どうしている……？」

フェリシアーノとはこの戦争ではぐれてしまつたのだ。アイツがどこにいるかなんて分かるはずもない。

生きているのかさえ分からない。

俺は何をしていいか分からなかつた。

腕に乗つてゐるルートを丁寧に地面に寝かせ、のそのそとその場に立つた。そして、周りを見回す。

(ルート・・・ギルベルトに、イヴァンまで・・・・・。)

みんな街のあちこちに横たわつていた。それぞれの衣服には血がべつとり付き、もう息をしていないのはそばに寄らなくても分かる。

その場に立つていたのは、俺ひとりだった。

「 サー！！・・・ サー！！」

俺を悪夢から救い出すように誰かが俺の名前を呼んでいる。

(誰だ？)

そう考えていた間も、誰かは俺の名前を呼び続ける。

「 ・・・ サー！！・・・ サー！！！」

がばつ！！！

俺の事を呼んでいた声の主が分かつた所で俺は思い切り目を覚ます。

「 ・・・ なんだ。フランシスか・・・。」

「 なんだってことは無いんじゃない？みんな待ってるよ。あの子たち連れてきたのはアーサーだろ？きちんと俺に紹介してよ」

「 そう言いながらフランシスは俺の部屋を出ていってしまった。」

「 ・・・ ああ」

そんなフランシスを見ながら小さく返事をする俺。返事をしたとき、もうフランシスの姿は見えなかつたけど。

(さつさと用意するか・・・。)

のうのうとベッドを降り、クローゼットを開けていつもの服を取り出す。最後に縁のマント。これで完璧・・じやない。

机の引き出しにしまつてある黒十字。ルートが息を引き取る前に俺に手渡しした物だ。俺はそれをいつもポケットに入れている。フェリシアーノに会つたら・・・これを渡すんだ。それまでは、アイツ等の所に行けない。

ポケットに入つていてる黒十字を強く握りしめ、俺は自分の部屋のドアを開けた。

黒十字（後書き）

ルート「・・・・・」
ギル「・・・・・。」
イヴァン「・・・・・。」
ゴルツ「」

本当に申し訳あつません。。。そして、ありがとうございます！

ガチヤン

階段を下りてリビングのドアを開けた。

「遅いんだぞ！」

「あるつ！ 静かにしてなよ～！」

ドアを開けたとたんたくさんの声が耳に入つて来る。

「おまえら・・・。静かにしろお～！」

俺が大きな声を張つて部屋を静かにさせる。静かになつたのを確認して俺は席に着いた。

「よし・・・。じゃあ、お前らの自己紹介からだ。」

目の前にいる兄弟二人は小声で相談している。4秒ほどじてから、いつもおどおどしている方がこちらを向いた。

「えっと、僕はマシューです。」しつちが双子の弟のアルフレッド。アルって呼んであげてください。」

「おう。俺は、アーサーだ。」ここのでコイツと一緒にパン屋をやつてる。あ、コイツは俺の兄貴でフラン시스だ。」

俺は親指でフラン시스の事を指差しながら自己紹介を進めた。

「う～ん。一緒にパン屋やつてるつていつも、コイツはスローンしか作れないから。真っ黒の、ね。」

フラン시스は俺に聞こえなによつ少し小さめの声でマシューとアルにそう教えたが、全て丸聞こえだ。

「んなつ！！ 最近はホットケーキも作れるよつになつたんだつ！」

「どうせそれも黒こげだらうがあ～！」

俺とフラン시스はお互いの首を掴みながら取つ組み合ひを始める。

いつまでたつても終わらなそうな俺たちの争いを終わらせた声が一
つ。

「一人とも…！そんな争いをやめ…それより、お前方に話したい事があるんや…！」

今まで見たことないような満面の笑顔でアンティークは部屋に入つて来た。

「お前…やけに上機嫌だな…どうした？トマト豊作か？」
フランシスは俺の首から手を離してぽかんとした顔でアンティークを指差しながら口を開く。アンティークと付き合いの長いフランシスがこれほど驚いているのだから、余程の一大事なのだろう。
「トマト豊作もええけど…、もつとええことがあつたんや…それがなあ…」

アンティークは笑つていた。なのに、アンティークの深い緑色の眼から大粒の涙が流れ落ちてきたのだ。

「それが…ロヴィーノが…！」田え覚ましてん…！」

涙をぬぐいながら話すアンティーク。

俺は、アンティークの話を疑つた。ロヴィーノは3年前の戦争の時、大けがを負つてしまつたのだ。その怪我が原因でずっと口を開いていなかつた。医者には、「もう一生口を覚まさないかもしぬれない。覚悟はしておいた方がいい。」とまで言われていたのだ。

「仕事から帰つたら、ロヴィーノ、ベッドから出て窓の外眺めとつてん…！…皆に早く伝えたかつたさかい、ロヴィーノにジシとしとるよつて言つて家飛び出して來たんや…！」はよロヴィーノとこ行こ…！」

俺たちは、何も言わずアンティークの家へと向かつた。

L - opportunity (後書き)

アーサー「ホントにホットケーキ作れるからな・・。ちょっと黒い
けど。」

今回の話も読んでください。あつがと「いじや」もこます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1241ba/>

アルとマシューの魔法修行

2012年1月14日17時56分発行